

主 題：主への約束を果たす 2

聖書箇所：使徒の働き 20章22-24節

先週（10/27）の続きです。

パウロは第3次宣教旅行の終わりに小アジアの港町ミレトに立ち寄りました。パウロはそこにエペソの長老たちを集めました。彼らに大切な働きを託してゆくために彼らを励ますのです。パウロはこれからエペソの教会に様々な問題が起こることを予想していましたから、パウロによってエペソで始められた働きを継続してゆくために長老たちを励ますのです。「主のしもべとして主に忠実に従い続けなさい」と。これはまた、私たちにも神が命じておられることです。なぜなら、これは私たちクリスチャンがこの地上において無駄のない後悔のない人生を送るために必要なことだからです。神の前に立ったとき、20：24にパウロが言うとおりの、「自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終え…」と、私は信仰者として精一杯生きましたとあかしができるためにも、このことをしっかり覚えなければならないとパウロは言います。

「主に仕えるその生き方とは？」

先週は《1.正しい動機をもって生きてゆく。主のために一生懸命していても、間違った動機でしているなら神からの祝福を失います。2.正しい働きをして行く。神が望んでおられる働きは、(1)みことばを教える、と(2)福音を伝える、です。これがクリスチャンに与えられた神の大命令です。すなわち、弟子をつくるということです。》を見てきました。今日はその3番目のことです。

3. 正しい価値観を持つように 22-24節

最も大切なことは何か、何を成すべきかを考え選んで行きなさい、ということです。これはイエスに従ってゆくということです。神に喜ばれることを行なってゆく、神のみこころがすべてに最優先となることです。なぜ神に忠実であろうとするのでしょうか？それはクリスチャンだからそうなのです。ではクリスチャンとされたとはどういうことでしょうか？

(1)新しい身分が与えられました

これはイエスの弟子としてイエスに従ってゆく者とされたということです。ヨハネ8：12「…わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」と、イエスを信じる者は決してやみ、罪の中を歩むことはない、その人は光の中を歩むのだと。ヨハネは「信じる」と言わないで「従う」と言いました。ローマ1：5を見ましょう。「このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためなのです。」と、これは非常に大切なことです。「信仰の従順」、これが「救い」なのです。神を信じた者の特徴は「神に従順に生きてゆこう」とするのです。同じローマ1：25「それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。」と、人間の問題がここに記されています。人間は生まれながらにまことの神に仕えるのではなく、偽りのものに仕え、罪を犯しているのだと言います。さらにこう説明されています。6：16-18「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」と、私たち人間はどちらかに仕えるのだ、神に仕えるのか神に逆らうサタンに仕えるのかだと。義の奴隷なのか、罪の奴隷なのか、というのです。いずれにしても、私たちはどちらかに仕える者なのです。もし私たちが、神ではなくサタンに仕えてゆくなら、私たちにあるのは永遠のさばき、死です。私たちが悔い改めて神に従って行こうとするなら、永遠のいのちが与えられると。同じことが6：20-22にも言われています。「罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たのでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。」と。イエスを信じる前の人は、罪を犯しても良心に恥じることはあっても神に対して罪を犯しているという意識はもちませんから、「自由にふるまっていた」というのです。永遠の死か、永遠のいのちかなのです。パウロはロー

マ1章で、私はこの神から託された福音のメッセージによって人々が悔い改め神に従う者になるように、この働きを成しているのだと言っています。また、パウロはローマ1:1、ピリピ1:1、テトス1:1で「キリスト・イエスのしもべパウロ、」と言っています。ヤコブもヤコブの手紙1:1で「神と主イエス・キリストのしもべヤコブが」と言っています。ペテロもユダも同じように言っています、「イエス・キリストのしもべ」と。イエスを信じて救われた者はキリストのしもべなのです。キリストに従う者なのです。

(2) 新しい目的が与えられた

その目的とは、「主のために生きて行く」ということです。22節を見ましょう。「いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。」パウロは私の人生は聖霊に満たされて、聖霊にすべてを明渡して歩んできたと言っています。「心を縛られて」とは「束縛する」とか「強いる」という意味です。彼の心は聖霊なる神によって縛られているということです。ここを原語から忠実に訳すとこのようになります。「いま私は、霊に縛られて、エルサレムに上る途中です」。「霊に縛られて」とこの「霊」とは「聖霊に縛られて」という訳ができます。聖霊が私を押し出してゆくのだということです。19:21に同じことばが出てきます。「…パウロは御霊の示しにより、」とあります。これの別訳は「彼の霊」です。どれも「霊」なのです。ここでは「御霊」と訳し、22節では「心」と訳しています。パウロが言いたかったことは、「私は私のすべてを主に明渡しているゆえに、聖霊なる神が私のすべてを支配して私を導いてくださる」ということです。これがパウロの望みであると同時に、私たちにも神が望んでおられることなのです。私たちは、神が私に望んでおられることが何かを常に考え、選択してゆこうとします。神に忠実でありたいという私たちの思いを神は知って導いてくださるのです。パウロは聖霊に押し出されてエルサレムに上って行きます。この第3次宣教旅行の後、パウロはエルサレムへ行き、そこからローマへと送られて行きます。パウロは私の人生はこれまでと違って、主にすべてを委ねて、主のみこころに従って生きてゆこうと言います。ローマ8:16「私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。」とあるとおりです。

また、この22,23節から分かることは、パウロは神にすべてを明渡した人生を歩むだけでなく、神を第一にする人生を生きていたということです。神が一番喜んでくださること、一番望んでおられることが何かを考えて選択していたのです。神が望んでおられることとは何でしょう。Iサムエル15:22に「…主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」とあります。私たちが神のみことばに忠実でありつづけること、それが神が望んでおられることです。22,23節のパウロのあかしから、パウロはどんな不安をかかえた時でも、神に従ってゆこうと決心していたことが分かります。22節の後半から見ましょう。「…そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。」、23節「ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っていると言われることです。」と、パウロはエルサレムで何が自分に待っているのかよく分かっていた。苦しみがあると。そこで自分が殉教するのかわからないけれど、そのことはどうでもいい、私は主に仕えてゆくのだというのがパウロのあかしです。23節では聖霊がパウロに教えるとあります。「なわめ」とは「縛る」とか「鎖」「投獄」という意味です。確かにパウロは投獄されます。パウロはこのことを知らされていたにもかかわらず、希望を失わないのです。神に従ってゆくのだと言います。私たちはパウロから学ぶべきです。私たちも同じことができるのです。

パウロは自分の人生をこのように理解していました。「自分の人生というのは、神のみこころを行なうようにと神から託されたものだ。だから、私の責任はこの神に忠実であることだ」と。24節「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」と、これが神が望んでおられることだから、私は喜んでそれに従ってゆきたいということです。後半にある「いのち」の原語には、「私自身にとって貴重」という説明が加えられています。すなわち、「私自身にとって貴重ないのちは少しも惜しいとは思わない」というのです。パウロが「いのち」をどのように見ていたのかがわかります。それは「いのちは確かに大切なものだけれども、いかなる犠牲をもっても保たなければならないとは思わない、このいのちよりもっと価値のあるものがあるから、ということです。どんな犠牲をもっても保つべきものがこのいのち以外にあるということです。それは何でしょう？神に対して従順であることです。ピリピ1:21に「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」とパウロは言っています。すなわち、パウロは自分のいのちは神のものだということです。私の人生を神のために犠牲にしようというのではないのです。これは神のものだと言います。神のために生きることが私の責任なのだ。パウロは自分が生かされている目的が何なのかをよくわかっていたのです。

このことはまた、イエスが私たちに教えられたことです。イエスは人々にこのようなメッセージをしました。ルカ 9：23, 24 「…だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。」、また、同じルカ 14：26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。」

と、これは救いのことです。サタンの支配から神に従うことへと方向転換するのです。悔い改めです。救いを得ようとするなら自分を捨てることだとイエスは教えておられます。

旧約聖書のヨシュア記にヨシュアもこれと同じことを言っています。23, 24 章を見ましょう。

23：1, 2 「主が周囲のすべての敵から守って、イスラエルに安住を許されて後、多くの日がたち、ヨシュアは年を重ねて老人になっていた。ヨシュアは全イスラエル、その長老たちや、かしらたちや、さばきつかさたち、およびつかさたちを呼び寄せて彼らに言った。私は年を重ねて、老人になった。」と、ヨシュアは自分の死が近いことがわかっていましたから、長老たちを集めてこのメッセージを贈って行きます。それがこの 23 章と 24 章です。23 章には同じことが 3 回繰り返されています。すなわち、3-8 節、9-13 節、14-16 節の 3 箇所に見ることができます。

3-8 節「あなたがたは、あなたがたの神、主が、あなたがたのために、これらすべての国々に行なったことをことごとく見た。あなたがたのために戦ったのは、あなたがたの神、主だからである。見よ。私は、ヨルダン川から日の入るほうの大海まで、これらの残っている国々と、すでに私が断ち滅ぼしたすべての国々とを、相続地として、くじによってあなたがたの部族に分け与えた。あなたがたの神、主ご自身が、あなたがたの前から彼らを追いやり、あなたがたの目の前から追い払う。あなたがたは、あなたがたの神、主があなたがたに告げたように、彼らの地を占領しなければならない。あなたがたは、モーセの律法の書にしていることを、ことごとく断固として守り行ない、そこから右にも左にもそれてはならない。あなたがたは、これらの国民、あなたがたの中に残っているこれらの国民と交わってはならない。彼らの神々の名を口にしてはならない。それらによって誓ってはならない。それらに仕えてはならない。それらを拝んではならない。ただ、今日までしてきたように、あなたがたの神、主にすがらなければならない。」

9-13 節「主が、大きくて強い国々を、あなたがたの前から追い払ったので、今日まで、だれもあなたがたの前に立ちはだかることのできる者はいなかった。あなたがたのひとりだけで千人を追うことができる。あなたがたの神、主ご自身が、あなたがたに約束したとおり、あなたがたのために戦われるからである。あなたがたは、十分に気をつけて、あなたがたの神、主を愛しなさい。しかし、もしもあなたがたが、もう一度墮落して、これらの国民の生き残っている者、すなわち、あなたがたの中に残っている者たちと親しく交わり、彼らと互いに縁を結び、あなたがたが彼らの中には行って行き、彼らもあなたがたの中には行って来るなら、あなたがたの神、主は、もはやこれらの国民を、あなたがたの前から追い払わないことを、しかと知らなければならない。彼らは、あなたがたにとって、わなとなり、落とし穴となり、あなたがたのわき腹にむちとなり、あなたがたの目にとげとなり、あなたがたはついに、あなたがたの神、主があなたがたに与えたこの良い地から、滅びうせる。」

14-16 節「見よ。きょう、私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。あなたがたは、心を尽くし、精神を尽くして知らなければならない。あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束したすべての良いことが一つもたがわなかったことを。それは、一つもたがわず、みな、あなたがたのために実現した。

あなたがたの神、主があなたがたについて約束したすべての良いことが、あなたがたに実現したように、主はまた、すべての悪いことをあなたがたにもたらし、ついには、あなたがたの神、主が、あなたがたに与えたこの良い地から、あなたがたを根絶やしにする。主があなたがたに命じたあなたがたの神、主の契約を、あなたがたが破り、行って、ほかの神々に仕え、それらを拝むなら、主の怒りはあなたがたに向かって燃え上がり、あなたがたは主があなたがたに与えられたこの良い地から、ただちに滅びうせる。」

⇒この三つの箇所を繰り返されている同じこととは、「神がなさったすばらしいみわざを教え、そして、イスラエルに対する責任を教えるのです。」 どんなにすばらしいことを神はしてくださったかを思い起こさせて、あなたには責任があるのだと教えるのです。

24 章を見ましょう。ここも、1-13 節と 14-24 節に同じことを見ます。

1-13 節「ヨシュアはイスラエルの全部族をシェケムに集め、イスラエルの長老たち、そのかしらたち、さばきつかさたち、つかさたちを呼び寄せた。彼らが神の前に立ったとき、ヨシュアはすべての民に言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられる。『あなたがたの先祖たち、アブラハムとナホルとの父テラは、昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた。わたしは、あなたがたの先祖アブラハムを、ユーフラテス川の向こうから連れて来て、カナンの全土を歩かせ、彼の子孫を増し、彼にイサクを与えた。ついで、わたしは、イサクにヤコブとエサウを与え、エサウにはセイルの山地を与えて、それを所有させた。ヤコブと彼の子らはエジプトに下った。それからわたしは、モーセとアロンを遣わし、エジプトに災害を下した。わたしがその真中で行なったとおりである。その後、あなたがたを連れ出した。

わたしが、あなたがたの先祖たちをエジプトから連れ出し、あなたがたが海に来たとき、エジプト人は、戦車と騎兵とをもってあなたがたの先祖たちのあとを追い、葦の海まで来た。あなたがたが主に叫び求めたので、主はあなたがたとエジプト人との間に暗やみを置き、海に彼らを襲いかからせ、彼らをおおわれた。あなたがたは、わたしがエジプトで行なったことをその目を見てから、長い間、荒野に住んだ。それからわたしはヨルダン川の向こう側に住んでいたエモリ人の地に、あなたがたを導き入れた。彼らはあなたがたと戦ったが、わたしは彼らをあなたがたの手に渡したので、あなたがたはその地を占領した。わたしが、あなたがたの前から彼らを根絶やしにしたからである。それから、モアブの王ツィポルの子バラクが立って、イスラエルと戦い、ベオルの子バラムに人をやって彼を呼び寄せ、あなたがたをのろわせようとした。わたしはバラムに聞こうとしなかった。彼は、かえって、あなたがたを祝福し、わたしはあなたがたを彼の手から救い出した。あなたがたはヨルダン川を渡ってエリコに来た。エリコの者たちや、エモリ人、ペリジ人、カナン人、ヘテ人、ギルガシ人、ヒビ人、エブス人があなたがたと戦ったが、わたしは彼らを、あなたがたの手に渡した。わたしは、あなたがたの前にくまばちを送ったので、くまばちがエモリ人のふたりの王をあなたがたの前から追い払った。あなたがたの剣にもよらず、またあなたがたの弓にもよらなかった。わたしは、あなたがたが得るのに労しなかった地と、あなたがたが建てなかった町々を、あなたがたに与えたので、あなたがたはそこに住み、自分で植えなかったぶどう畑とオリーブ畑で食べている。』

14-24 節「今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕えなさい。あなたがたの先祖たちが川の向こう、およびエジプトで仕えた神々を除き去り、主に仕えなさい。もしも主に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、主に仕える。」すると、民は答えて言った。「私たちが主を捨てて、ほかの神々に仕えるなど、絶対にそんなことはありません。私たちの神、主は、私たちと私たちの先祖たちを、エジプトの地、奴隷の家から導き上られた方、私たちの目の前で、あの数々の大きなしるしを行ない、私たちの行くすべての道で、私たちの通ったすべての民の中で、私たちを守られた方だからです。主はまた、すべての民、この地に住んでいたエモリ人をも、私たちの前から追い払われました。私たちもまた、主に仕えます。主が私たちの神だからです。」すると、ヨシュアは民に言った。「あなたがたは主に仕えることはできないであろう。主は聖なる神であり、ねたむ神である。あなたがたのそむきも、罪も赦さないからである。

もしあなたがたが主を捨てて、外国の神々に仕えるなら、あなたがたをしあわせにして後も、主はもう一度あなたがたにわざわいを下し、あなたがたを滅ぼし尽くす。」それで民はヨシュアに言った。「いいえ。私たちは主に仕えます。」それでヨシュアは民に言った。「あなたがたは、主を選んで、主に仕えるという、自分自身の証人である。」すると彼らは、「私たちは証人です。」と言った。「今、あなたがたの中にある外国の神々を除き去り、イスラエルの神、主に心を傾けなさい。」民はヨシュアに言った。「私たちは私たちの神、主に仕え、主の御声に聞き従います。」

⇒1-13 節には、神がどんなにすばらしいことをこのイスラエルに対して成してくださったのか、アブラハムに対して、イサクに対して、ヤコブに対して、そしてモーセに対して。それを人々に思い起こさせるのです。そして、14-24 節に、あなたたちには責任があるのだと教えるのです。14, 15 節でヨシュアは言います。「あなたたちの責任はこの偉大な神に仕えてゆくこと」だと。そして、「私と私の家とは、主に仕える。」と言います。これがヨシュアの選択でした。イスラエルの民は口では「主に仕える」と言ったのです。しかし、ヨシュアは彼らの心に偶像があることを知っていました。だから、民に言います。23 節「あなたがたの中にある外国の神々を除き去り、イスラエルの神、主に心を傾けなさい」と。

私たちは自分を吟味するべきです。私は神に対して忠実であるかと。パウロがエペソの長老たちに、

そして、私たちクリスチャンにも教えたいことというのは、イエスを信じるということ、罪の赦しをいただくということ、ほんとうのクリスチャンになるということ、イエスに従っていくと決心した者たちなのだという事です。キリストのしもべとされた私たちは神に対して忠実でありなさいと言われる。

II コリント 4:7-5:10 4:7 「私たちは、この宝を、土の器の中に入れていたのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

4:8 私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。

4:9 迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。

4:10 いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。

4:11 私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。

4:12 こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのです。

4:13 「私は信じた。それゆえに語った。」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っている私たちも、信じているゆえに語るのです。

4:14 それは、主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたといっしょに御前に立たせてくださることを知っているからです。

4:15 すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現われるようになるためです。

4:16 ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

4:17 今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。

4:18 私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

5:1 私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。

5:2 私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。

5:3 それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。

5:4 確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためにです。

5:5 私たちをこのことにかなう者としてくださった方は神です。神は、その保証として御霊を下さいました。

5:6 そういうわけで、私たちはいつも心強いのです。ただし、私たちが肉体にいる間は、主から離れているということも知っています。

5:7 確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。

5:8 私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。

5:9 そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。

5:10 なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。

ピリピ 1:19-21 「というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。

ピリピ 3:8 「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあく

たと思っています。」